

新聞史により歴史を紡ぐ、中学校歴史学習の実践とその効果

～近現代史の流れを捉える能力の育成と新聞への意識の変容に対する検証を通して～

岡野 英輝*

1 はじめに

中学校社会科の目標には、「公民的資質」の基礎を養うことが掲げられており、これは民主的な社会を築く上で必要なものとされている¹⁾。この民主的な社会を世相として反映してきたのが「新聞」である。新聞は民主主義社会の発展に大きく貢献したメディアであり²⁾、我々は新聞を通して、国内外の現在の情報を具体的に得ている。また、新聞の特色ある構成は効率的な情報伝達の手本であり、さらに、新聞を批判的に読むことで、情報リテラシーの向上にも効果がある³⁾。こうした利点から、新聞は社会科において積極的に取り入れられ、実践も多数紹介されてきた。しかし、一方で、新聞教育の課題が多く指摘され、昨今は多様なメディアの出現で、新聞ばなれも加速している。我々は今、新聞に対する教材開発の視点を、単に現在を見つめるためという枠を超えて再考する時期にあるのではないだろうか。そこで筆者は、新聞をその時々を映してきたメディアと捉え、蓄積された歴史（以下、新聞史と記す）に着目した。特に、教科書の近代以降の単元には、政治史や文化史の各項目に、新聞に関する記述が散見する。これらを一本につなぎ、テーマ史として取り上げれば、近現代史の流れを捉えるためのツールとして活用できると考えた。本研究は、新聞史をテーマ史の中核に位置付けた指導計画の立案と実践を通して、歴史学習の見地からの教育的効果について検証したものである。

2 歴史を紡ぐ新聞史学習

(1) 「歴史を紡ぐ」ことの意義

歴史的分野の目標の一つに、歴史の大きな流れを理解させることがある⁴⁾。この目標達成のため、本研究では、諸分野を総合的に結びつけて、各時代の特色を捉える「横断的関連付け」と、時代間のつながりを捉える「縦断的関連付け」を図っていく。これらの関連付けを重視する背景には、日本では1950年代より本格的に研究されてきた「歴史意識」がある⁵⁾。先行研究によれば、中学生の歴史意識の特色は、事象同士の因果関係に着目して捉えられる点にあり、時代構造や歴史の発展の理解も可能になるとされている⁶⁾。因果関係の把握や時代構造の理解は、異なる分野の事象同士の横断

的関連付け、歴史の発展の理解は、つながりを捉える縦断的関連付けにつながる。よって、横断的・縦断的関連付けは、中学生の歴史に対する関心を高め、認識を深化させることにも効果があるものと言える。本論では、この二つの関連付けを重視して歴史を捉える活動を「歴史を紡ぐ」と称し、具体的には、図1のように、時代の特色を多面的に捉え、つながりを見出せるテーマを設定した系統的学習を展開していく。

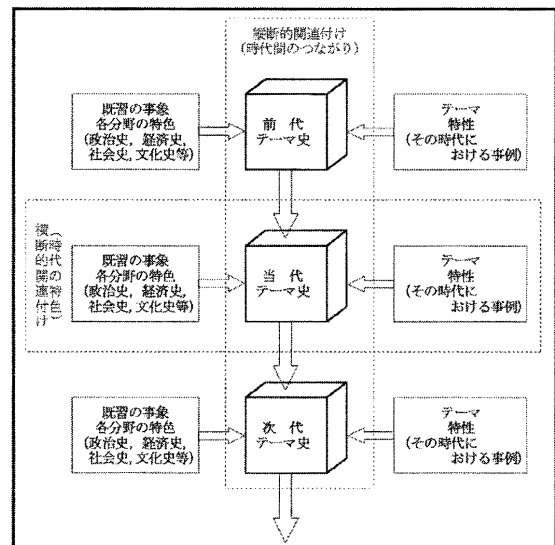


図1 「歴史を紡ぐ」概念図

(2) 近現代史を紡ぐ「新聞史」

近現代史は、現在につながる歴史として、歴史学習の中でも特に重視されている⁷⁾。中学校では、まず欧米における「近代革命」を通して、市民社会の誕生を学ぶ。その後、日本の近代では、「明治維新」により近代化を推し進める中で、欧米の文化や民主主義の思想が広まっていったことを学習する。よって、近代以降の歴史の流れを捉えるには、以下の条件を満たすテーマ設定が必要であり、本研究ではそれを「新聞史」に見出した。

- ① 各時代における日本の民主的側面を具現化できるもの（横断的関連付けのツール）。
- ② 外国の影響から日本に普及し、受け継がれているもの（縦断的関連付けのツール）。

*茨城県かすみがうら市立千代田中学校

①に関しては、明治以降、政治的分野を中心に民意の反映を求める動きが見られた。それを具体的な文字情報として示したのが「新聞」である。大衆が受け取る共通の情報媒体の発達により、長谷川如是閑の「少数の英雄の時代から多数の個人から成る群の時代へ」⁸⁾に象徴されるように、大衆としての意識が萌芽し、それが世論の形成へと結びついていった。よって、民主的国家成立の過程を総合的に捉える上で、新聞は適切な教材と言える。

②に関しては、日本での新聞は、文久年間の翻訳紙が創始とされ⁹⁾、開国及び近代化の進展と共に広まった。明治に入り、自由民権運動が高揚すると、政論新聞(大新聞)が主流となり、やがてその衰退と共に大衆向けの小新聞が普及する¹⁰⁾。その後、海外との交渉や戦争に対して各自の社説を展開する新聞が刊行されて読者を増やし¹¹⁾、大正期には新聞が世論を先導する立場となった場面も見られた。そして、昭和初期の言論統制下においては、検閲を受けながら発行する等、新聞は時代に応じてその性格を柔軟に変化させながら存続してきた。この新聞史の流れは、近代国家成立の過程で社会の様子や国民の生活が変化し、諸外国との通交や二度の大戦を経て、民主的な国家建設へと進んでいく近現代史の流れに通じるものがあり、縦断的関連付けにも適した教材と言える。

(3) 「新聞教育」の課題

国家の「民主的」側面を教える上で、極めて具体的に、好都合な教材であった新聞は、戦後間もなくの頃から学校教育に導入された¹²⁾。しかし、それによる課題もすぐに表面化することとなる。ここでは、その課題に関わる先行研究を分析し、内容を明らかにする。

小野秀雄は、衰微した新聞学習の対照にあるものを進学準備とし、現実的性格を有する新聞も、進学こそ現実的な学校教育においては、理想的なものとする皮肉を伝えている¹³⁾。また、重松敬一は、学習のま

めとして「社会科新聞」等の新聞を作る活動は、作ること自体が目的となる実践が多く、その教育的効果を疑問視している¹⁴⁾。両者は、新聞を読む、作ることに終始した学習に対する「方法的課題」を指摘していると言える。

馬場四郎は、進行形の新新聞記事は、「簡単に結論を出したり(中略)、価値判断をなすことに困難を感じる」¹⁵⁾と述べ、教材としての不安定さを指摘する。これは、新聞がもつ「性格的課題」に言及したものである。この、新聞記事の断片的な採用に関しては、近年、佐藤有紀らも新聞を取り入れた歴史の授業を行う上での課題として指摘している¹⁶⁾。

さらに馬場は、「現代の新新聞文章は、小・中学校の児童生徒には読めない用語や記事が多い」と述べ¹⁷⁾、新聞の読解に難解性が伴う「内容的課題」を指摘している。

加えて、現在の新聞は、多様なマス・メディアの一つに過ぎず、むしろ、その量的、直感的に享受させる力は、テレビやインターネットに大きく差をつけられている。そこから来る「新聞ばなれ」が、近年加速しているという課題がある。市川正孝は、新聞ばなれの増大は、「民主主義社会の危機」と述べており¹⁸⁾、これは、「社会的課題」と言える。

(4) 学習者の実態

前項に挙げた課題の表面化は、新聞教育の在り方を見つめ直す契機となり、1950年代より、新聞と教育に関する実態調査がさかんに行われた。中でも、52年の亀井一綱の調査(以下、亀井調査と記す)は、項目も多岐にわたる詳細なものであった¹⁹⁾。近年では、2008~09年の日本新聞教育文化財団の調査(以下、NIE調査と記す)がある²⁰⁾。筆者は、NIE調査から数年が経過した今、改めて現代生徒の実態を把握する必要があると判断し、実践対象である本校生徒に、新聞に関するアンケート調査を行った(以下、千代田調

表1 新聞に対する意識調査の結果と先行研究との比較(一部)

		千代田調査 (2014)			亀井調査 (1952)			NIE調査 (2008~09)		
Q1	新聞をどの程度読むか? (毎日、時々、まったく読まない)	毎日 8.2			毎日 69.5%			毎日 20.6		
Q2	新聞を読み始めたのはいつ頃か?	10歳の頃 33.4			10歳の頃 34.0					
Q3	新聞を信用しているか?(全面的○、かなり○、どちらも、あまり×、まったく×)	全面的○ 13.1	かなり○ 41.0	どちらも 44.3	全面的○ 4.9	かなり○ 59.1	どちらも 16.3			
Q4	次の活動に関心があるか?(読む、書く、発表、聞く、調べる、語彙増、新聞作)	発表 14.8	調べる 65.6	新聞作 11.5				発表 11.7	調べる 28.6	
Q5	新聞記事に対する習慣、深さ、読み方はどれに当てはまるか?(項目は表9参照)	1位 テレビ 32.8	2位 スポーツ 23.0	3位 マンガ/天気予報 13.1				1位 ラ・テ欄 67.6	2位 スポーツ 46.6	3位 マンガ 33.5

査と記す)。結果は、新聞を読み始める時期は亀井調査と差異はなかったが、毎日読む生徒は8.2%と、亀井、NIE両調査と比較しても圧倒的に少なかった。また、信用度は、「全体的」に、あるいは「かなり」信用できる割合が亀井調査と大差はなかったものの、意志を明確に示していない「どちらとも言えない」が千代田調査において高かった。これらは、「社会的課題」を顕著に表していると言える。また、学習のまとめとして社会科新聞を作る活動に対して、「好きである」が11.5%と低く、これは、作る目的が不明瞭なまま学んでいる故と考えられ、前述の重松の指摘した「方法的課題」が垣間見られる。よく読む記事に対しては、NIE調査とほぼ同様の順位となった。その特色としては、読解に時間を要したり、継続的に読んだりする必要がある記事は、読む対象から外れる傾向にある。これは、新聞記事の断片的な提示が教育的課題となる一方で、実生活の中では、すぐに読み取ることのできる記事がよく読まれている現状を表している。

上述及び表1の結果は一部であるが、本校生徒は新聞に触れる機会が少なく、故に新聞への関心やその教育的効果についても実感がもてない傾向がある。また、前述の新聞教育の課題が千代田調査の結果にも表れており、半世紀前より指摘されてきたものながら、これらは現在の課題として捉える必要があるであろう。調査結果に見る傾向は本校に限らず、近年の中学生の実態を反映していると考えられる。新聞に触れる機会を計画的に設定し、その教育的効果を味わわせることで、新聞に対する意識も変容してくるのではないだろう

うか。

(5) 課題解決の具体策と新聞史学習

前述の課題を解決するため、新聞史を以下のように授業にかかわらせていく。

「方法的課題」に対しては、扱う時代の新聞の特性を、各次の目標と関連付けて取り上げる。「性格的課題」となる新聞記事の断片的な提示に対しては、その断片的性質をむしろ直視し、同時代の事象と関連付けて補完・連関を図っていく。「内容的課題」に対しては、事象の特色を反映した部分を読み取らせたり、小山榮三²¹⁾や三樹精吉²²⁾がその重要性を指摘する「見出し」に着目させたりして、新聞記事の主旨や論点について思考していく。「社会的課題」に対しては、新聞が各時代によって異なる性格をもちながら、身近に現存している事実を読み取らせ、新聞の意義や教育的効果を実感として捉えさせていく。

以上のことから、「方法」「性格」「内容」の各課題は、横断的関連付けを、「社会的課題」は、縦断的関連付けを取り入れることで、解決の方向へ導くことができる。よって、「歴史を紡ぐ」授業は、歴史の大きな流れの理解という目標に向かうことができると同時に、新聞教育の課題を歴史学習の見地から解決していく可能性を有していると考えられる。

3 単元構想と授業実践

(1) 指導計画の立案にあたって

新聞史により近現代の「歴史を紡ぐ」学習を行うに

表2 新聞史により「歴史を紡ぐ」単元区分(全8次)

	単元名	時代区分	教科書上の単元名と新聞に関する記述(25)	小野の区分	阿部らの区分	目標(指導要領から)
第1次	新聞の誕生と欧米での影響	(欧米の)近代	近代革命の時代 ・新聞と啓蒙思想			欧米諸国が近代社会を成立させたことの理解
第2次	欧米から日本への伝来	江戸(幕末)	開国と不平等条約 ・横浜と「海外新聞」	・新聞の創始	新聞導入期	開国による政治的・社会的な影響の理解
第3次	伝来から日刊紙の創始へ	明治	世界とつながる日本と文明開化 ・新聞と近代思想の紹介		大新聞と小新聞という二層構造期	欧米諸国の制度や文化の影響による人々の生活の変化の理解
第4次	創始から普及へ		自由民権運動の高まり ・民撰議院設立の建白書 ・新聞紙条例	・政論新聞時代 ・政党機関紙時代		自由民権運動の全国的広まりの理解
第5次	普及から浸透と商業化		日露戦争 ・新聞による主戦論	・自主独立の新聞 ・企業化時代	独立新聞の興隆期	日露戦争のあらましと国内外の反応の理解
第6次	浸透から大衆メディアとしての定着	大正	大正デモクラシーと政党内閣の成立 ・護憲運動、米騒動と新聞大衆文化 ・活字文化の広がり	・東京紙最後の敢闘 ・企業化徹底時代 ・大阪系紙の東京進出	二大紙による企業化進行期	政党政治、民主主義、社会運動の展開についての理解

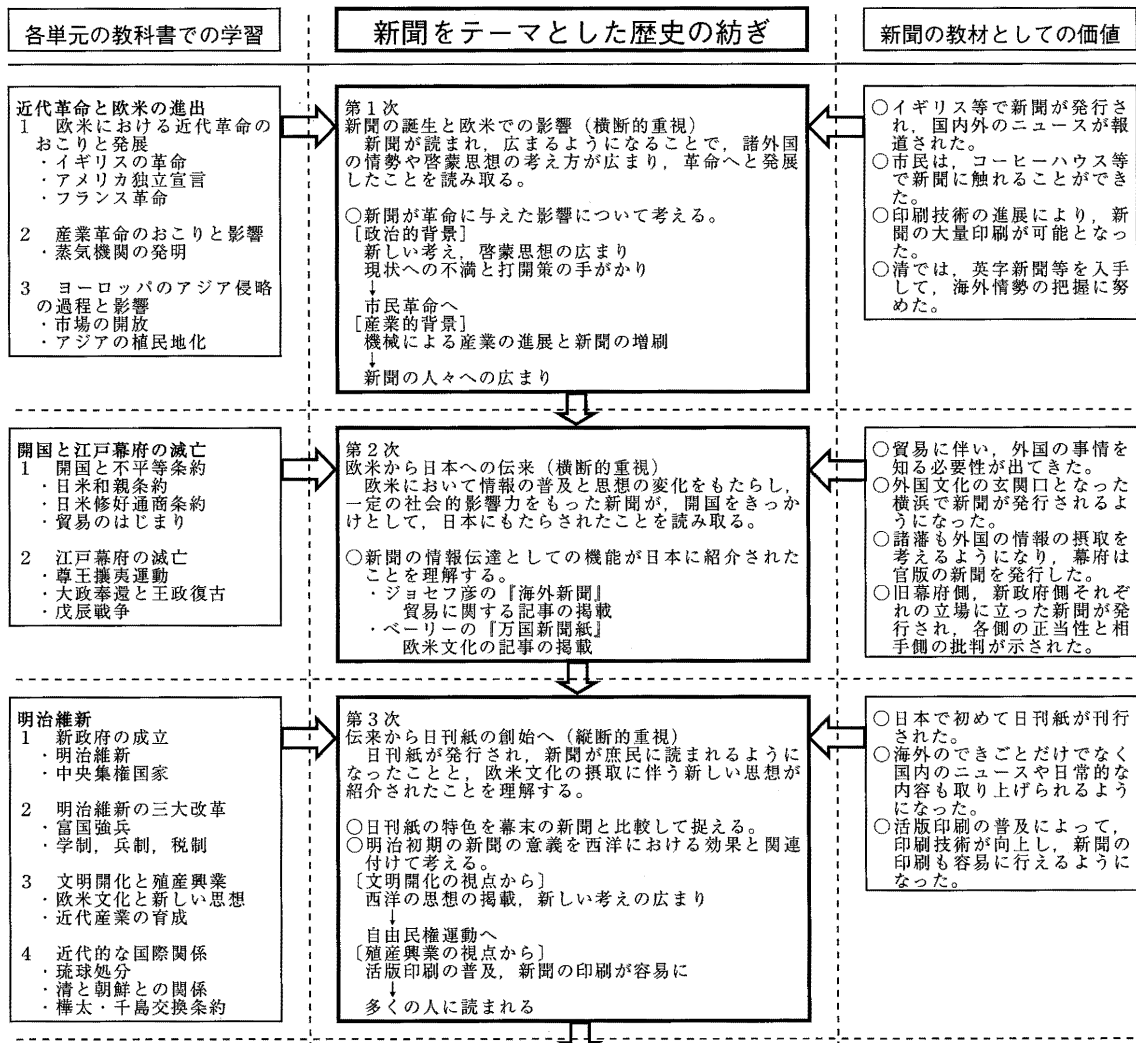
第7次	定着したメディアの利用	昭和	戦時下の人々 ・情報統制下の新聞	・軍部態度の硬化 ・統制時代	言論統制期	戦時体制下での国民の生活の変化の理解（平和なことの大切さ）
第8次	新しい新聞の役割	戦後	民主化と日本国憲法 ・日本社会の変化とマスメディア	・戦後の混乱期 ・復興へのあきがき ・試練に立つ日本の新聞界	テレビとの競合期	民主化と経済成長を経て、国際社会に生きる日本とその役割についての理解
		平成				

あたり、近現代史を全8次に区分した。これは表2のように、教科書に散見する新聞に関する記述を集め、小野秀雄による新聞の歴史を論じる上での区分²³⁾や、阿部・西垣らの新聞通史の時代区分²⁴⁾をふまえて、新聞の役割や影響の特色ごとに分けたものである。また、各次の目標（表3の単元名の次に記載）は、各次の内容にかかる指導要領の目標（表2に記載）に照らして設定した。

(2) 指導経過

表3は、各次の実践における新聞学習の指導経過の詳細である。尚、全次が横断的・縦断的関連付けの両要素を取り入れた実践だが、各次の内容と新聞記事の特性に応じて、その取り入れに軽重を付けた。これは、各授業の課題を明確にした上で、時代の特色や時代間のつながりをより確実に捉えさせていく展開にするためである。

表3 新聞史により「歴史を紡ぐ」テーマ学習の指導経過²⁶⁾



自由民権運動と立憲国家

- 自由民権運動の高まり
 - 藩閥政治への批判
 - 自由民権運動
 - 国会開設の勸諭
- 立憲制国家の成立
 - 大日本帝国憲法
 - 帝国議会

第4次
創始から普及へ（横断的重視）

欧米では革命となって現れた新聞の影響が、日本では民権運動（言論による政府批判）となって現れたことを理解する。また、政府の新聞への対応を通して、新聞の重要性が増してきたことを読み取る。

○民権運動とその時期の新聞の役割について考える。
・建白書や政府のスクャンダルの新聞への掲載
↓
・民権運動の広がり
・政府が新聞紙条例を出した理由
↓
・新聞の重要性の認識
・新聞に見出しのなかった時代
↓
政府のスクャンダルを新聞に掲載するにあたり、新聞紙条例を意識した見出しについて考える

○民権議院設立の建白書が新聞に掲載された。
○政府は「新聞紙条例」を制定し、自由な言論を制限した。
○政府のスクャンダルとして「開拓使官物払い下げ事件」が、新聞に掲載された。

日清・日露戦争と産業革命

- 欧米列強の侵略と条約改正
 - 帝国主義
 - 条約改正
- 日清戦争
 - 日清戦争の経緯
 - 下関条約
- 日露戦争
 - 日露戦争の経緯
 - ポーツマス条約と戦後
- 韓国と中国
 - 韓国併合
 - 辛亥革命
- 産業革命の進展
 - 産業の発達と労働問題
- 近代文化の形成
 - 欧米文化の消化
 - 学校教育の普及

第5次
普及から浸透と商業化（横断的重視）

新聞の国民への浸透は、新聞を発行するというビジネスを生み、それに伴い、「より読まれる」「より売れる」新聞作りへと転じていくことで、さらにその浸透は拡大していくことを読み取る。

○外国との戦争時、新聞が国民に与えた影響について考える。
〔主戦論と新聞〕
・「号外」を発行し、戦争の詳細を伝える
↓
・国民が戦争への関心を高める
↓
・より多くの新聞が売れる
〔新聞の見出し〕
・日本に有利な書き方
↓
・主戦論の増加、国民意識の統一、政府への賛同
〔戦後と新聞〕
・条約内容の報道
・暴動事件への結び付き
↓
日本国民への新聞の定着へ

○主戦論、非戦論ともに新聞に掲載された。
○新聞の多くが主戦論を取り、新聞の動きが戦争前後より、新聞の「号外」が発行され、戦争経過の速報が定期的に報じられた。
○新聞で条約の内容を伝えたり、日比谷焼き打ち事件が起った。

大正デモクラシー

- 第一次世界大戦とロシア革命
 - 第一次世界大戦の経緯
 - ロシア革命とその影響
- 国際協調とアジアの民族運動
 - 戦後の国際協調体制
 - アジアでの反日運動
- 大正デモクラシー
 - 護憲運動と米騒動
 - 政党内閣の成立
- 社会運動と普通選挙の実現
 - デモクラシーの影響の具体例
 - 治安維持法
- 大衆文化
 - 中等、高等教育の普及
 - 大衆文化の発展

第6次
浸透から大衆メディアとしての定着（縦断的重視）

大正時代の政治的できごとの報道から、当時の新聞と国民の関係について考える。

○新聞が大正デモクラシーと大衆文化の時代に、国民に与えた影響について考える。
〔護憲運動から〕
・憲法を無視した政治による国民の不满の高まり
↓
・新聞が国民を護憲運動へと導き、内閣を退陣させる
〔米騒動から〕
・騒動についての記事を連日掲載
↓
・各地での暴動の拡大
・政府による騒動記事の差し止め
↓
・すぐに取り消される
↓
新聞の定着と影響力増大の認識
〔大衆文化から〕
・新聞の発行拡大、大衆メディアとしての定着

○新聞を中心に護憲運動が起りそれを大衆が支持して当時の内閣を退陣させた。
○米騒動は連日新聞で報道され、報道の禁止命令も出されたが、すぐに取り消された。
○新聞が発行部数100万部を超える等、大衆の活字文化として完全に定着した。

第二次世界大戦と太平洋戦争

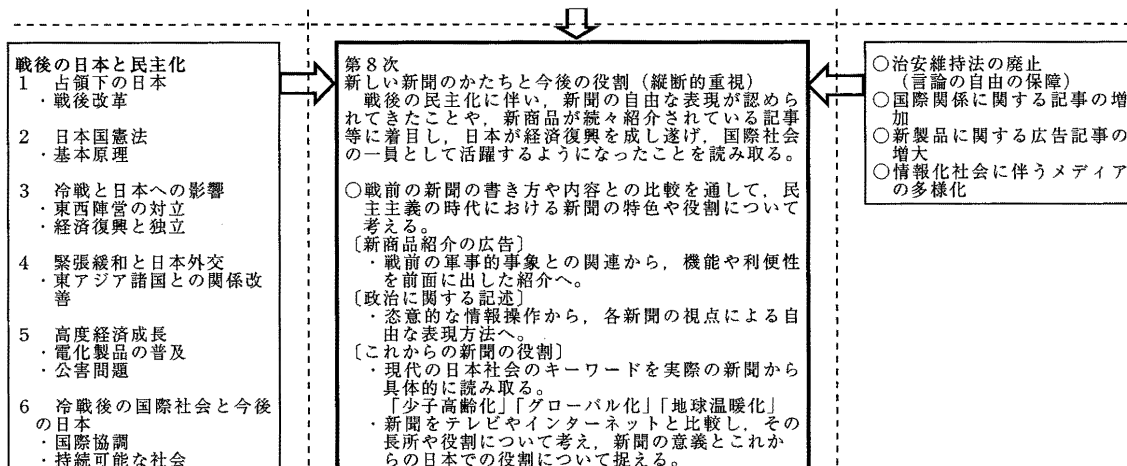
- 世界恐慌と諸外国の情勢
 - 世界恐慌と日本への影響
- 日本の中国侵略
 - 中国侵略と軍部の台頭
- 第二次世界大戦
 - 大戦の経緯
 - ファシズム
- 太平洋戦争
 - 太平洋戦争の経過
- 戦時下の人々
 - 国民生活と情報統制
- 戦争の終結
 - 枢軸国の降伏

第7次
定着したメディアの利用（横断的重視）

大衆のメディアとして定着したことで、挙国一致の時代において、新聞を通じた情報統制ならびに限定された情報の発信が行われ、それによって国民の感情が統一されていったことを読み取る。

○統制された新聞の記事や広告を通して、戦時中の新聞が日本国民に与えた影響について考える。
〔新聞記事から〕
・日本の優勢に関する記事と劣勢に関する記事の比較
・外国の記事の書き方、取り上げ方の違い
↓
・情報の統制が国民に与える影響の大きさ
〔新聞広告から〕
・商品の広告のほとんどが戦争に関する内容
↓
挙国一致の思想の徹底

○ドイツは徹底した新聞の情報統制を行った。
○アメリカは、統制をせず、不利なニュースも国民に伝えた。
○日本国民の戦意はマスメディアによって高められた。
○情報は日本政府の統制下に置かれ、国民には正確な戦況すら知らされなかった。



(3) 指導の実際

第1次は、イギリスの「コーヒーハウス」で新聞を読んで語らう人々、「新聞がなければフランス革命は起きなかつたらう」というヴィクトル・ユゴーの言葉、産業革命による生活への影響の3点から、新聞の役割と影響について調べた。生徒たちは学習を通し、新聞に掲載された啓蒙思想に触れたことにより、人々へ民主的な考えが広まったことと、産業革命が新聞の大量印刷と情報の速達化を可能としたことを捉えた。このように、本次では、新聞の「革命を後押しする役割」「社会を変えてしまう影響力」について理解することができた。

第2次で取り上げた『海外新聞』『万国新聞紙』は、資料としての情報量が少なく、内容の読解は難しい。しかし、幕末の既習事項である「開国」「横浜が最大の貿易港」等の事象と関連付けて記事の内容を思考することにより、海外事情や文化を紹介するという特色を的確に読み取ることができた。このように、資料が断片的なものであっても、横断的関連付けを通して、その補完と連関を意識することで、歴史的事象を多面的に捉えるための参考となることが、生徒の思考を通して実証できた。また、まとめでは、前次の学習と関連付け、「日本人はもっと外国のことを知りたいと思った」等、新しい情報が、政治や文化の変化・進捗につながる可能性があることを捉えることができた。

第3次は、日本初の日刊紙『横浜毎日新聞』の記事を、幕末の新聞との違いという視点から捉えた。相違点として生徒たちからは、「海外事情だけでなく、国内のニュースも掲載されるようになった」「月刊から日刊に変わった」等の意見が聞かれた。また、福沢諭吉の記事を取り上げ、ここでも詳細な読解ではなく、既習事項の「文明開化」「福沢諭吉による新しい思想の紹介」をふまえることにより、新聞が「日本に取り入れられた新しい考え」を紹介する役割を担ったこと

を理解させることができた。

ここまでの第1～3次の学習を通して、生徒たちは、欧米で新聞が国民に与えた影響（第1次）と、新聞の日本への伝来（第2次）とによって、維新期の日本が物理的・精神的に欧米を模倣し、新時代を築いていった様子を理解することができた。創始の時代の「新聞」の教材化は、幕末から維新期にかけての変革の時代を捉えることに有効であると考えている。

第4次は、新聞の普及と自由民権運動の関連付けである。特に、民権議院設立の建白書が『日新真事誌』に取り上げられたことによる民権派と、「新聞紙条例」を發布し取り締まった政府側双方の視点から、新聞が国民にとって重要視されてきたと同時に、政府による取り締まりの対象となってきたことを読み取った。また、開拓使官有物払い下げ事件を新聞に取り上げる際の見出しについて、新聞紙条例に触れないように考える活動を取り入れた。生徒たちは知恵を絞り、「税金が泣いている」「発見！激安開拓使施設」等、皮肉やユーモアを交えた見出しを考えていた。これらの活動を通して、民権派と政府の対立関係を理解すると共に、見出しの重要性についても実感として捉えることができた。

第5次は、この時期に発行された「号外」と、新聞に表れ始めた「見出し」を取り上げ、日露戦争時に号外を発行した各新聞社のねらいとそれを読んだ国民の気持ちについて考え、多くの新聞が主戦論をとった事実と背景を捉えた。生徒からは、「主戦論を増やすため」「戦争が有利に進んでいることを早く知らせるため」等に加え、「自分の新聞を買ってもらうため」という考えも聞かれた。また、見出しから、日本の戦況について国民が知るための重要なメディアとなってきたことを読み取った。前次までで生徒たちは、新聞が政府や国民を動かす力をもち始めたことを学習してきた。その新聞が浸透してきた時代、国民の意識を統一

する効果と新聞側の商業的思惑が芽生えてきたことを捉えることで、新聞が国民だけでなく、政府にとっても重要な存在であった点を理解することができた。しかし、商業化については、十分に取り上げ、検討することができず、課題となった。

第6次は、大正時代のキーワードである「デモクラシー」の理念を理解するための教材とした。「第一次護憲運動」と「米騒動」の見出しから、国民の社会運動へのつながりを理解する学習を通して、生徒たちは、新聞の民衆への定着を捉えることができた。さらに、政府による米騒動の記事掲載禁止の命令がすぐに解除された理由を、第4次の「新聞紙条例」と比較しながら考え、新聞の影響が確実に大きくなってきていることを理解した。

ここまでの第4～6次の学習を通して、生徒たちは、新聞が日本に普及・浸透してくるにしたがって、国民や政府が情報を得、考えたり行動したりするための拠り所として定着する過程を理解することができ

た。主要メディアとしての「新聞」の教材化は、明治から大正にかけて、民衆が政治に関心を高めていく様子を捉えることに有効であると考えられる。

第7次は、戦時中の新聞記事の特色を、「戦果」「女性・子ども」「外国」「宣伝・広告」の各テーマごとに捉える学習を行った。この頃の新聞記事は、見出し以外の内容も読みやすくなり、写真等も掲載されてくるので、当時の生活の実態を具体的に捉えることができた。実際の授業では、テーマ別に分かれたグループごとに特色を調べ、図2のワークシートにまとめた。各グループが読み取った特色は、表4の通りである。生徒たちは、戦時中の新聞を、政治、社会、文化と横断的に関連付けて、挙国一致の戦争運営について、具体的に理解することができた。また、情報操作の事実に触れることで、新聞が国民感情を左右すること、新聞に対して冷静に向き合う必要があることを実感する生徒も多くいた。

歴史と「新聞」7
太平洋戦争と新聞
3年(2)組 名前()

◆戦時中の新聞記事から、当時の日本をよすを探ろう。

【自分のテーマ】 外国の記事に関する特色

(1) 新聞の見出しから の特色、資料集と の比較	(2) 書かれている内容 の表現の仕方	(3) 新聞は何を伝えたかったのか？ この記事を讀んだ記者はどのよう なことを考えたのか？
戦争新聞に多い 砲台軍 射撃場まで 三カ茶 中学から英語 道放	英軍がソルムまで 進軍した。 ドイツの新兵器の 大砲が強いこと 中学校で英語を 学ばなくなった。	日本が強いこと、 相対的強点。 ドイツは強か、強い ハゲ強い 勉強が楽になった

テーマ1 日本の戦争	テーマ2 女性・子ども	テーマ3 外国の記事	テーマ4 広告
戦争に勝つたその ような言方。 日本人をやる気 させている	女性も子供も 国のために戦う 勝利のために 勉強が楽になった	アメリカが弱か、弱 か、弱 強さ 強さ 強さ	小さい子供し戦争を 意識している アメリカの失敗を 書き、「たいしたことは ない」と思わせた。

Q 戦時中の記事から、新聞は、当時の日本にどのような役割を果たしたか考えよう。
戦争に勝つてると国民に安心させる役割
・普段の生活よりも戦争を意識させた。

Q 今回の調べ学習を通して、「新聞」に対して抱いた感想を書いてみよう。
国民を安心させるような新聞の書き方がうまいと思った。

表4 生徒が読み取った戦時中の新聞の特色

テーマ	内容
戦果	<ul style="list-style-type: none"> 戦争に勝ったような書き方をしている。 日本軍が有利な書き方をしている。 日本人をやる気にさせている。
女性・子ども	<ul style="list-style-type: none"> 女性や子どもでも国のために戦う。 自国の勝利のために、女性や子どもを使っている。
外国	<ul style="list-style-type: none"> 味方のドイツが強い書き方をしている。 味方が強いことをアピールしている。 読んだ国民は、アメリカを弱いと思う。 アメリカの失敗を書き、「たいしたことはない」と思わせた。
宣伝・広告	<ul style="list-style-type: none"> 人々は、国のためになるから貯金しようと思った。 子どもでも、広告で戦争を意識している。 日本人を団結させようとしている宣伝をしている。

図2 第7次のワークシート

第8次は、戦前との違いを中心に、戦後から現代にかけての記事の特色を調べた。生徒たちは、言論の自由により再び見られるようになった政治批判の記事や、高度経済成長期を示す新製品の広告等を通して、民主主義国家として歩み出した日本の様子を具体的に捉えた。また、新聞を各自用意して、現代を学ぶためのキーワード「少子高齢化」「グローバル化」「地球温暖化」が新聞記事として具現化されていることを読み取った。最後は、新聞の今後の役割について考えた。

生徒たちは、「メディアの利便性」「情報とその信憑性」「災害対策」「公民としての自覚」等、いずれも公民学習への序章となる要素を含んだ意見を述べていくことができていた。

第7、8次は、主に第1～3次で捉えた、新聞が新しい情報を伝えてきたことと、第4～6次で捉えた、新聞が世論を形成して政治や社会に影響を与えてきたこと、その両方の流れの理解の上に成り立つ单元である。第7次は新聞の特色が情報操作や言論統制とし

て、第8次は民主化と言論の自由として表れているが、どちらも、新聞の読み手に与える影響力の大きさを認識した上で、時代を反映した情報を発信している点は共通する。この特色が、今日の新聞の意義や役割を考えるための材料となっている。戦中・戦後の「新聞」の教材化は、現在の新聞に至る過程をふまえて、特色を捉えることに有効であると考えられる。

4 実践の検証

(1) 「横断的関連付け」に関する検証（ワークシートへの記述から）

ここでは、「新聞がその時代に与えた影響、果たした役割」についての生徒の考えを取り上げて検証する。尚、詳細は後述するが、縦断的関連付けに対する学習者の典型的な反応の特徴として、3つの類型が

見られたので、本節の横断的関連付けに関しても、各類型の典型事例となる抽出生徒3名の考えを取り上げ、検証の対象とした。表5の生徒の考えに引いた下線は、各時代の目標につながると捉えられる箇所である。

時代の特色を捉える上で、中核に位置付けたテーマに集約するように他事象を関連付けることで、新聞史が帰納的、演繹的思考を促す役割を果たした。時代の特色が新聞史にも反映されていたり、新聞史から学んだことで他分野の特徴を見出すヒントとなったりすることで、時代をより多面的に見た上で思考することができたと考えられる。テーマ史から「歴史を紡ぐ」学習は、生徒の横断的関連付けの思考を促すことに効果を有すると言える。

表5 各時代の新聞の役割に対する抽出生徒の意見（全8次分）

次	1 革命と新聞	2 幕末と新聞	3 文明開化と新聞	4 自由民権運動と新聞
（指導要領から） 目 標	欧米諸国が近代社会を成立させたことへの理解	開国による政治的・社会的な影響（明治維新への影響）の理解	欧米諸国の制度や文化の影響による人々の生活の変化の理解	自由民権運動の全国的広まりの理解
生徒A	人々に新しい情報や考え方を広める発信源となった。	「海外のような生活がしてみたいかも」「外国のことをもっと知りたい」と思わせた。	新しい思想がたくさんの人に伝わった。	国民が政治に参加するきっかけとなった。
生徒B	革命を後押しするような役割。いろいろな情報を知ったり広めたりする役割。	海外のことをもっと知りたくなった。海外のことを知り、取り入れたいと思った。	新しい考えや学問に関する影響。	運動を助ける役割。
生徒C	人々にはとても大事なもので、色々な情報を得ることができて良いが、時には悪影響を及ぼすことがある。	知識が増え、政治の話題が増えた。	人々の、日本や政治、世界への関心が高まった。	国民たちが情報を知る唯一の情報手段だった。板垣退助にとってはとても便利なものだった。
次	5 日露戦争と新聞	6 大正デモクラシーと新聞	7 太平洋戦争と新聞	8 現代、そしてこれからの社会と新聞
（指導要領から） 目 標	戦争のあらましと国内外の反応の理解	政党政治、民主主義、社会運動の展開についての理解	戦時体制下での国民の生活がどう変わったかの理解（平和な生活を築くことの大切さ）	民主化と経済成長を経て、国際社会に生きる日本とその役割についての理解
生徒A	戦争をしている日本の状況を国民に知ってもらう。	日本の状況を伝える役割。国民がその記事で行動を起こすきっかけになった。	日本が戦争に有利という記事と、敵の国を侮辱する記事を書き、日本軍はすごいだろうと国民に伝える役割。	文字が大きくなったりして、幅広い年代の人が読める。
生徒B	賛成派（主戦論）を増やし、たくさんの人々に戦争の情報を広める役割。	国民に事件を広める情報源。	日本は強いということをアピールして、国民をやる気にさせたり、希望をもたせる役割。	前は国にとっていいことばかり書いていたけれど、今はいいことも悪いことも書いています。
生徒C	人々が日本の状況をいち早く知ることができ、また人々の考えを見直すためのものになった。	政治を守ろうとするはたらきもあるが、国民を騒がせる内容も載るような新聞であった。	わざわざ節約までして戦争に勝ってほしい願いがあつたため、日本が有利になっているような記事にして、国民に勇気を与えていた。	内容が分かりやすく、厚い。誰にでも気軽に読める。

(2)「縦断的関連付け」に対する検証（ワークシートへの記述から）

ここでは、前項に示した表5の意見を、縦断的関連付けの観点から検証する。

生徒Aは、維新期までの新聞の役割を「新しい情報を広める」と捉えている。その後、普及の時代では、「人々を政治的に動かす役割」を見出し、それが、戦時中の「国民の気持ちを左右する」との表現につながる。そして、戦後には、「幅広い年代の人」に読んでもらえるものと捉え、現代へのつながりを認識している。生徒Aは、「黎明期の効果→普及期・戦時中の影響→戦後の特色」と捉えており、これを、「累積型の捉え」とする。

生徒Bは、国民に情報を「広める役割がある」ことを根底に置いている。それは、第1,2次での考えを、第5,6次でも「広める」という語句を用いて表現し

ていることから分かる。また、戦前と戦後では、その広めた情報の違いを明確にして捉えている。生徒Bは、初期の思考を基盤として、つながりを意識しており、これを「基盤型の捉え」とする。

生徒Cは、最初、「情報を得るためのもの」と考えているが、次第に、「世界への関心」「特定の人物にとって便利なもの」「人々の考えを変える」等、新聞がもつ影響力を様々な角度から分析している。その多角的な思考が、第6,7次では、国民と政府の両方から言及させている。第8次の表現はややつながりが希薄だが、生徒Cは、新聞の影響を中心とした歴史の変化や進展を総合的に捉えている。これを、「総合型の捉え」とする。

この3名の捉え方を基準に、学年全員の考えを分類して示したものが、図3である。

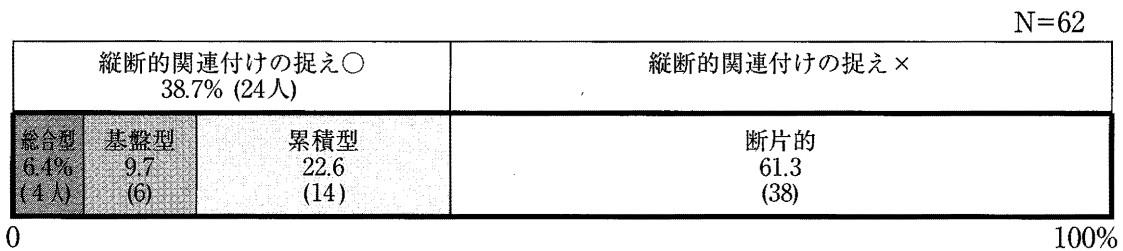


図3 各次の思考に見る、縦断的関連付けの捉えのパターン

抽出生徒のように、近代から現代にかけて、つながりで理解できていると読み取ることができた生徒は、全体のおよそ4割弱という結果になった。その他の生徒は、各時代ごとの捉えは的確であるが、時代の変化や進展が意識できず、どの時代にも「情報を知らせる、広める、伝える役割」とのみ記述している考えも少なくなかった。

(3)歴史の大きな流れを捉えることに対する検証（まとめの学習における記述から）

「歴史の大きな流れ」の理解に関して、「近代から現代にかけて、新聞は、日本にどのような役割を果たしてきたか」と発問し、考えを記述させる活動を行った。その記述内容を、表6のような分析視座を設定し、分類した上で検証する。分類の結果は、図4に示す。

表6 新聞の役割に対する思考レベル

レベル1	無回答・意味不明
レベル2	新聞の役割についてのみ言及しており、横断的・縦断的関連付けが見られない考え ・いろいろな情報を伝えてきた。 ・国民が新しい情報を知るための役割。
レベル3	新聞の役割について言及し、時間的・距離的克服を意識している考え ・日本にいながら、外国の情報を知ることができる貴重な情報源。 ・情報をいち早く伝達し、詳しい内容を知ることができる。
レベル4	新聞の役割について言及し、横断的・縦断的関連付けをふまえている考え ・その時その時の生活の仕方を国民に教えてくれた役割。 ・日本の国民が、自分の考えをもつきっかけをずっと作ってきてくれた。
レベル5	新聞の役割について言及し、横断的・縦断的関連付けを意識して総合的に捉えている考え ・社会に情報を発信したり、政治に対する考えをコントロールしたりする役割を果たしてきた。だから、国民の立場から見れば、敵になったり、味方になったりしてきた。 ・政治のことをたくさん国民に教えてくれた。国民も政治に対して不満があったら反抗することもやった。そうやって、新聞の情報は、国をかえていく役割をもっていた。

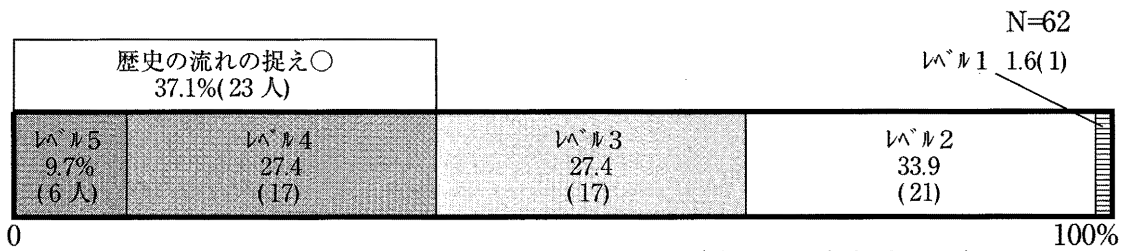


図4 新聞の役割に対する生徒の思考の分類 (表6の分析視座より)

本研究のねらいである、「テーマ史から歴史の大きな流れを捉える」ことのできた生徒は、37.1%となった。決して高い数値ではないが、3人に1人以上の割合で、歴史の流れを意識した考えをもつことができるようになっている。

(4) 新聞に対する意識の変容に関する検証 (事後アンケートから)

①新聞への信用の変容について

事前調査のQ3「新聞を信用しているか」と同様の設問を事後に実施した (表7)。

表7 「新聞を信用しているか」に対する調査結果と事前・事後の比較

項目	全面的信用	かなり信用	どちらとも	あまり信用×	全く信用×
事前数(割合)	8人(13.1%)	25(41.0)	27(44.3)	1(1.6)	0(0)
事後数(割合)	10(16.1)	34(54.8)	17(27.4)	1(1.6)	0(0)
割合の比較	+3.0ポイント	+13.8	-16.9	±0	±0

(N=事前61, 事後62)

全体的に、「かなり信用」の項目をはじめ、信用する割合が増加している。関心のない状態とも取れる項目にあった生徒が、新聞の長所を見出して移行した結果も読み取れる。

②様々な学習活動に対する意欲の変容について

事前調査のQ4「次の活動に関心があるか」と同様の質問を事後に実施した (表8)。

全体的に共通しているのが、「好きである」割合の増加である。特に、「新聞を作る」は、大々的に本実践には取り入れていないが、新聞の構成力や表現力が国民に与える影響、見出し作りや新聞から受ける影響等について考えてきた。その成果は、やや消極的ではあるが、「好きではない」生徒が半減した事実となって表れていると捉えている。

表8 「次の活動に関心があるか」に対する調査結果と事前・事後の比較

	読む		書く		発表する		聞く		調べる		語彙増		新聞作る	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
好き 上:人数 下:割合	28	43	20	29	9	15	21	41	40	53	22	29	7	13
	45.9	69.4	32.8	46.8	14.8	24.2	34.4	66.1	65.6	85.5	36.1	46.8	11.5	21.0
どちらとも	28	16	32	27	30	30	34	20	18	8	36	29	28	36
	45.9	25.8	52.5	43.5	49.2	48.4	55.7	32.3	29.5	12.9	59.0	46.8	45.9	58.1
好きではない	5	3	9	6	22	17	6	1	3	1	3	4	26	13
	8.2	4.8	14.8	9.7	36.1	27.4	9.8	1.6	4.9	1.6	4.9	6.5	42.6	21.0

* 事前と事後の人数が同数ながら、割合の数値が異なるのは、調査人数の相異による。

(N=事前61, 事後62)

③新聞を読む習慣、読みの深さ、読み方に対する意識の変容について

事前調査のQ5「新聞記事に対する習慣、深さ、読み方はどれに当てはまるか」と同様の質問を事後に実施した(表9)。

新聞を読む習慣は、「全く×」の割合が減少し、全体的に様々な記事に触れ始めている。読みの深さは、

読む習慣の増加に伴い、見出しの項目の数値が増加傾向にあり、また、全体に目を通そうとする者の割合も高くなっている。読み方は、全体的に、自分が読もうとする記事は、全部読んでみようとする者が増加している。総じて、新聞を読んでみようとする生徒は増加傾向にあり、関心も高く、意識が深化していることが分かる。

表9 新聞を読む習慣、読みの深さ、読み方に対する調査結果と事前・事後の比較

*太枠は、事前調査と比較し、事後調査において3.2ポイント以上上昇を見た項目。
(但し、読む習慣の全く×の項目は、進展の増加ではないので、該当項目としていない。)

		読む習慣			読みの深さ			読み方	
		いつも	時々	全く×	全部	途中	見出し	全部	一部
1 政治	事前	1.6%	34.4	63.9	4.9	21.3	9.8	24.6	11.5
	事後	4.8%	35.5	59.7	11.3	17.7	11.3	25.8	14.5
2 外国	事前	4.9	24.6	70.5	9.8	14.8	12.9	16.4	13.1
	事後	6.5	35.5	58.1	4.8	24.2	4.9	25.8	16.1
3 社説	事前	0	9.8	90.2	0	9.8	0	3.3	6.6
	事後	1.6	11.3	87.1	1.6	8.1	1.6	6.5	8.1
4 経済	事前	3.3	24.6	72.1	6.6	14.8	6.6	18.0	9.8
	事後	3.2	25.8	71.0	1.6	21.0	6.5	21.0	8.1
5 社会	事前	8.2	45.9	45.9	9.8	32.8	11.5	32.8	21.3
	事後	9.7	45.2	45.2	14.5	24.2	16.1	33.9	21.0
6 文化・芸術	事前	3.3	11.5	85.2	3.3	6.6	4.9	8.2	6.6
	事後	1.6	19.4	79.0	3.2	9.7	8.1	8.1	11.3
7 家庭・子ども	事前	0	8.2	91.8	0	6.6	1.6	4.9	3.3
	事後	0	19.4	80.6	3.2	9.7	6.5	8.1	11.3
8 小説	事前	3.3	6.6	90.2	3.3	6.6	0	4.9	4.9
	事後	3.2	8.1	88.7	6.5	3.2	1.6	4.8	6.5
9 マンガ	事前	13.1	27.9	59.0	39.3	0	1.6	37.7	3.3
	事後	16.1	35.5	48.4	46.8	4.8	0	51.6	0
10 スポーツ	事前	23.0	29.5	47.5	29.5	18.0	4.9	32.8	19.7
	事後	21.0	33.9	45.2	29.0	21.0	4.8	40.3	14.5
11 広告	事前	3.3	32.8	63.9	11.5	9.8	14.8	9.8	26.2
	事後	1.6	48.4	50.0	11.3	12.9	12.9	19.4	30.6
12 写真	事前	4.9	24.6	70.5	9.8	13.1	6.6	14.8	14.8
	事後	11.3	24.2	64.5	25.8	6.5	3.2	25.8	9.7
13 地方版(茨城版)	事前	4.9	24.6	70.5	8.2	14.8	6.6	16.4	13.1
	事後	8.1	19.4	72.6	11.3	12.9	3.2	11.3	16.1
14 テレビ	事前	32.8	42.6	24.6	29.5	41.0	4.9	23.0	52.5
	事後	27.4	38.7	33.9	33.9	29.0	3.2	30.6	37.1
15 芸能	事前	6.6	36.1	57.4	8.2	29.5	4.9	21.3	21.3
	事後	9.7	24.2	66.1	11.3	16.1	6.5	17.7	16.1
16 教育・学校	事前	1.6	13.1	85.2	1.6	8.2	4.9	9.8	4.9
	事後	0	19.4	80.6	4.8	9.7	4.8	8.1	11.3
17 書籍紹介	事前	6.6	4.9	88.5	4.9	4.9	1.6	6.6	4.9
	事後	4.8	12.9	82.3	12.9	0	4.8	12.9	4.8
18 投書	事前	0	4.9	95.1	0	4.9	0	3.3	1.6
	事後	0	9.7	90.3	0	8.1	1.6	1.6	8.1

N=事前 61, 事後 62

↓ : 新聞への関心の増加

↙ : 新聞への関心の深化(高次への移行)

↘ : 新聞への関心の後退(低次への移行)

5 おわりに

新聞史をテーマとした「歴史を紡ぐ」学習は、歴史の大きな流れを捉えさせるために一定の効果があった。特に、横断的関連付けを図るためには大変有効であった。また、新聞教育にまつわる課題を克服するための具体策を授業に取り入れることで、それらの課

題が解決され、新聞に向き合う意識の醸成にも効果的であることを実証できた。縦断的関連付けに関しては、4割弱の生徒が時代のつながりを理解できたことから、変化する社会とメディアのもつ影響力を多面的に捉えさせることへの効果があったと考えている。この効果は、多様なメディアからの情報を適切に読み解

き、活用する能力の育成に結びついていくものである。現在につながるテーマ史を通して、生徒に歴史という連続性を意識して思考させることは、これからも多様に変化していくであろう現代社会の中で、主体的に生きていく態度を育成するためにも意義のあることと考える。今後は、一枚のワークシートに自分の考えを継続的に書き込めるようにしたり、発問を工夫したりすることに努め、縦断的関連付けをより定着させるための手立てを追究していく必要性を感じている。

実践および調査結果の検証は、あくまで本校生徒を

対象に行ったものである。しかし、大規模に実施したNIE調査と類似する傾向やNIE調査よりさらに深刻な「新聞ばなれ」の実態が認められた本校での実践を通して見られた教育的効果は、一般的な実践においても同様の効果が期待できるものと考えられる。

「歴史を紡ぐ」中から得た能力を、現代社会の理解と、よりよい未来の構築のために活用させていくことは、地歴公3分野の関連付けにもつながる。公民的分野の学習と有機的に関連付けた指導計画の立案と実践を今後の課題とし、研究を継続していきたい。

註

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領』2008 p.31。ここでは、社会科の目標が示されており、「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」とある。
- 2) 小野秀雄は、「民主主義社会が、第一に発達したのはイギリスであるが、その際、大きな役割を果たしたのは新聞である」と述べている（小野秀雄他『新聞と教育』1958 日新出版株式会社 p.2）。また、K.Martinの主張を島田巽が翻訳する中で、その要約として述べたものの中に、「新聞の自由は、長期にわたる困難な戦いで克ちとられた民主主義政治の根本原則である」とあり（K.Martin（島田巽訳）『新聞と大衆』1955 岩波書店 p.187）、民主主義の根本にある新聞の重要性に言及している。
- 3) 近年の、新聞を活用した情報リテラシーの育成に関する実践ならびに研究としては、吉田正生「社会科メディア・スタディズのための中学校社会科歴史授業の開発－明治政府のメディア政策－」（『社会系教科教育学研究 第23号』2011 社会系教科教育学会 pp.1-10.）、橋本祥雄他「新聞を活用した情報 読解力の育成－中高等部によるNIE実践－」（『京都教育大学教育実践研究紀要 第12号』2012 京都教育大学 pp.23-32.）等がある。
- 4) 文部科学省 前掲 pp.35-36.
- 5) 戦後、子どもの発達段階に応じた学習とそのためのカリキュラムの必要性が叫ばれた。その中、歴史教育の分野においても、歴史的事象のどのような側面に興味・関心をもち、どのように理解・認識することが可能かを捉える「歴史意識」の調査研究がさかんに行われた。その先駆的役割を担ったものに、1953年、斎藤博によって提唱された「歴史意識の層構造」がある。内容の詳細は、斎藤博「歴史 意識の発達」（上田薫編『社会科教育史資料4』1974 東京法令）を参照されたい。
- 6) 中学生の歴史意識については、斎藤博（前掲）、藤井千之助（『歴史意識の理論的・実証的研究』

- 1985 風間書房）、横山十四男（『中学生の歴史意識・歴史的思考力（その1）』（歴史教育研究会『月刊歴史 教育』1980.10 東京法令出版）らが、本文に示した特色を言及している。尚、歴史意識ならびに斎藤、藤井、横山らの理論の特色等については、拙稿「現代中学生の歴史意識の現状と課題－茨城県土浦市 新治地区における地域史に関する意識調査を事例に－」（茨城大学教育学部『茨城大学教育学部紀要 教育科学（59）』2010 茨城大学教育学部 pp.1-20.）で詳細に述べている。
- 7) 文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』2008 日本文教出版 p.14。ここでは、従前の近現代史 という単元を、近代史と現代史に分けて構成した理由について、「近現代の学習を一層重視し、現代の社会についての理解が深まるように配慮したものである」と述べられている。
- 8) 長谷川如是閑『新聞』1954 朝日新聞社 p.134
- 9) 阿部猛・西垣晴次『日本文化史ハンドブック』2002 東京堂出版 p.297
- 10) 岡満男『近代日本新聞小史』1969 ミネルヴァ書房 p.39
- 11) 小野秀雄『新聞の歴史』1961 東京堂 pp.47-77.。小野は、条約改正問題や日清戦争と三国干渉、対ロシアとの関係と日露戦争等が記事となる中で、政論新聞や小新聞が改変・発展していったことや、政党への偏重や民衆への迎合を排した、いわゆる「独立新聞」の刊行等、多種多様な新聞が出現してきたことを論じている。また、個々の新聞の増加率はまちまちであると断った上で、「日露戦争によって新聞の読者は増加した」と述べている。
- 12) 小野秀雄他『新聞と教育』1958 日新出版株式会社 はしがき p.1
- 13) 小野秀雄他『新聞と教育』1958 日新出版株式会社 はしがき p.2
- 14) 重松敬一「『新聞学習』の成立と条件」（井口一郎他『新聞学習のプラン』1952 教育弘報社 p.77）
- 15) 馬場四郎「新聞教育のカリキュラム」（小野秀雄

- 他『新聞と教育』1958 日新出版株式会社 p.76)
- 16) 佐藤有紀・久保田亘「『昔の新聞』の授業内活用法を探る－中学校社会科における学習材化の紹介－」(埼玉学園大学『埼玉学園大学紀要(人間学部篇) 第10号』2010 埼玉学園大学 p.309)
 - 17) 馬場四郎 前掲 p.61
 - 18) 市川正孝「『市民教育』を目指す『新聞教育』」(愛知教育大学『探究 25号』愛知教育大学社会科学教育学会 2014 p.20)
 - 19) 亀井一綱「青少年の新聞への接近」(小野秀雄他『新聞と教育』1958 日新出版株式会社 pp.15-51.)
 - 20) 日本新聞教育文化財団の調査としては、「NIE実践の実態調査結果報告(2008.7)」,「2009年度「NIE効果測定調査」結果報告(2010.7)」がある。
 - 21) 小山榮三『新聞社会学』1951 有斐閣 p.98
 - 22) 三樹精吉『新聞の編集－「整理」と呼ぶ活字の造型術－』1955 同文館 p.72
 - 23) ここでは、小野秀雄『新聞の歴史』1961 東京堂において、小野が新聞の歴史を論じる上で章立てを行った13の区分を参考としている。
 - 24) ここでは、阿部猛・西垣晴次 前掲 p.297 の「新聞通史」の項を参考とした。
 - 25) ここで言う「教科書」とは、本校で使用している、東京書籍『新しい社会歴史』のことである。
 - 26) 表3の「指導経過」とは、立案した指導計画を、図1に示した、「歴史を紡ぐ」概念図に当てはめ、実践に際しての具体的な内容と指導方法に絞って提示したものである。